

世界に目を向け、未来を見つめる。

[ボイス・オブ・ライフ]

2024.SPRING

VOICE OF LIFE

Take Free

07

フィリピン

バタアン

「死の行進」と

捕虜虐殺

日本の戦争加害を考える

DEATH MARCH



KM
0-B

KM
00



Dialogue for People

COVER PHOTO

太平洋戦争初期、バタアン半島で起きた「死の行進」のスタート地点にある碑。倒れた戦友に手を差し出す捕虜の姿が描かれている。

取材／田中えり・佐藤慧

日米の戦いの舞台となったフィリピン

フィリピンの首都マニラから北西へ4時間ほど車で走ると、ビルが立ち並んでいた都心の風景が遠くの間々まで見通せる自然豊かな景色に変わっていった。車は、バタアン半島に入る。太平洋戦争初期、日本とアメリカの戦闘の舞台となった場所だ。



「死の行進」スタート地・バガクにある記念碑。銃とヘルメットの像が掲げられている。

のガイドを務める Seneca Huleko さんに案内いただき、バタアン半島を巡った。

「死の行進」は米比軍降伏の日、4月10日に始まった。日本軍は捕虜となった米比軍兵士約7万6000人を捕虜収容所への移送のため最長100数キロ歩かせた。このうち半数が半島南端のマリベレス近郊を出発。もう半

灼熱が照りつける中、一日に20〜25キロほど歩みを進めたという。道中、マラリアなどの病気や、日本軍の監視兵による虐待、殺害などで多くの死者が出た。死者数は7000人とも、1万人とも言われる。収容所での死者も合わせると約3万人ともされている。

この「死の行進」は日本軍の残虐性を伝える事件として知られている。

フィリピン バタアン

フィリピンの歴史は、スペイン、アメリカ、そして日本による支配の歴史と言える。

1500年代からスペイン領だったフィリピンは、米西戦争を経た1898年、アメリカによる統治が始まった。1935年に独立準備政府が置かれ、その10年後の独立へ向けて準備が進んでいた時、太平洋戦争が勃発した。

1941年12月8日、日本軍はハワイ真珠湾への攻撃後、フィリピン侵攻を開始。1942年1月にマニラを占領し、アメリカ軍はバタアン半島で抵抗を続けた。そして同年4月3日からアメリカ、フィリピン(米比)軍と日本軍による総力戦が行われ、4月9日、サマツ山

数は4月11日、バタアン半島西海岸近郊のバガクを出発したとされる。半島から歩いてバンバンガ州にあるサンフェルナンド駅へ行き、そこから列車で収容所最寄りのカバス駅へ。駅から収容所までは再び徒歩で移動した。

捕虜が歩いた道のりには、現在1キロごとに白い碑があり、終着地点まで続いている。いずれも、行進の距離を示す数字と「DEATH MARCH」(死の行進)という言葉が刻まれている。

VOICE OF LIFE

「死の行進」と

をとった人など、監視兵により銃剣で殺された人もいた。

捕虜が歩いた道をたどる途中、パンティンガン川という川に立ち寄った。

「死の行進」当時、この川の近くで、約400人の捕虜が日本軍によって虐殺された。捕虜たちは、15人から30人ほどのグループごとに山道の崖沿いの場所に連れてこられ、銃剣などで殺されていたという。

捕虜については、太平洋戦争当時も国際条約で人道的な扱いが



「死の行進」終着点にある碑。

定められていた。にも関わらず、なぜ「死の行進」や捕虜の虐殺は起きてしまったのだろうか。

見下し、侮蔑—— 捕虜へのまなざし

最長100キロ以上も徒歩で移送させた理由については、さまざまな要因が考えられている。まずは、捕虜の多さ。捕虜の数は日本軍の想定(約4万人)のおよそ2倍だった。将校らは車両輸送が不可能であると結論付け、歩かせることにしたという。

次に、半島は水や食料が不足し、マラリアも多く発生する地域だった。食料確保や衛生的な観点からも他の場所への移動が必要だった。

日本の戦争加害を考える

取材 田中 えり Eri Tanaka

2014年、栃木県の新聞社に記者として入社。2023年、D4Pに加入。メンタルヘルス、災害のほか、東京電力福島第一原発事故による避難者、原発被災地域の取材も継続的に行う。



バタアン半島の地図。

捕虜虐殺

としてあげられる。

日本軍は、自国の兵士に捕虜になることを認めていなかった。捕虜になるくらいなら死を選べ、という考え方だった。よって兵士たちは「降伏は恥」「捕虜は非国民」と考え、そしてそれは、目の前に現れたアメリカ兵、フィリピン兵の捕虜への侮蔑、虐待そして虐

殺につながる一因となってしまうのではないだろうか。

「加害」も「被害」も 生まない未来を

第二次世界大戦による日本軍人・軍属の犠牲者は約230万人にのぼる。民間人の犠牲者は約80万人。軍人・軍属の犠牲者のうちおおむね半数は餓死とされ、降伏できずに敵陣へ突撃し玉砕したケースもある。沖縄で

バタアン戦の最激戦地となったサマツ山周辺。山頂には十字架が佇む。

もし太平洋戦争当時、日本軍が自国の兵士に捕虜になることを認めていたら——。日本軍の「捕虜観」は「捕虜は恥」という極端なものとは違っていただろう。バタアン半島で、目の前に現れたアメリカやフィリピンの捕虜たちへの日本兵のまなざしは、虐待や虐

は強制集団死があった。捕虜になることが許されていれば、軍人も民間人もかなりの数の命が助かっていたと推測される。

日本の軍国主義の下で、人々は「死」以外の選択肢を奪われた。兵士も市民も、ひとりの人間としての「命」がないがしろにされていた。一方で、捕虜は「死」以外の選択肢を選ぶことが許された人々だった。

「被害と被害の両面から見ないと、戦争の真髄は見抜けないですよ」

バタアン半島へ向かう道中でHideoさんが投げかけてくれたこの言葉を胸に留め、加害も被害も生まない未来について、考え続けたい。

田中えり



[上]「バタアン最終決戦の地」と書かれた看板。この場所で戦闘があったことを伝えている。[下]サマツ山からの風景。遠くにマニラ湾が見える。

殺につながる「見下し」や「侮蔑」とはまた別のものだったのではないだろうか。

「死の行進」の加害者は日本軍で、日本にその責任があることは間違いない。一方で、ひとつの国、ひとりの人の中には、戦時中の加害と被害の両方の側面がある。一面だけを見ていては、何かを見落としてしまう。

理不尽を見つめ続ける「ハンダラクくん」 パレスチナ・ヨルダン川西岸地区



ヨルダン川西岸地区ジェニン難民キャンプの壁に描かれたハンダラクくん。

佐藤 慧 Kei Sato

アフリカや中東、東ティモール、自然災害の被災地などを取材。世界を変えるのはシステムではなく人間の精神的な成長であると信じ、紛争、貧困の問題、人間の思想とその可能性を追う。



戦争は本当に長い年月にわたり社会を蝕みます。書類上で停戦や終戦を迎えたとしても、破壊された街々の再建はもとより、心に負った傷や痛みと向き合い、日常を継続するエネルギーを取り戻すには多くの時間がかかるのです。そして、失われた命は二度と戻ってきません。本号では、フィリピンにおける日本軍の加害行為に焦点をあてましたが、「人が人を殺す」ということが日常的に、それも称えられる行為として行われる戦場では、人間の精神の歪みと、恐ろしいほどの残虐性に直面します。1948年、イスラエル建国に際し土地を奪われた人々が暮らすヨルダン川西岸地区の難民キャンプでは、いまだにそうした理不尽な暴力が続いています。ある日突然家を破壊され、金品を強奪され、家族の頭を撃ち抜かれる——。それでも沈黙を続ける国際社会。パレスチナには、こうした過酷な現実から目を逸らさずに直視し続ける存在がいます。パレスチナ人風刺画家ナージー・アル・アリー氏が生んだキャラクター「ハンダラクくん」です。パレスチナの街々を歩いていると、そんなハンダラクくんの姿をよく見かけます。その背中からは、「僕は目をそらさない。君は——?」と問いかけているようです。

編集後記

中山 大輔 / D4P管理部



今回で7号目。そして2024年3月で団体設立からちょうど5年となりました。当時設立総会を行ったのは小さな貸会議室、参加したのは設立理事メンバー+α。あっといふ間の5年間でしたが、当時を思い出そうにも記憶は薄いです。僕もきっと社会的にはまだまだ若輩ですが、新しい職員が増えたりすると、どうしても自分の年齢を意識してしまう今日この頃。ここまで活動を支えてくださったみなさまに感謝して、次なる5年も精進してまいります。



認定NPO法人Dialogue for People (ダイアログ・フォー・ピープル/D4P)

国内外さまざまな地域で社会課題の渦中にある人々を取材し、写真や文章、映像などさまざまな表現を通じて、「伝える」ことを主軸に活動するメディアNPOです。どこか遠くの問題に思ってしまう出来事について、誰もが考え、自分の役割を見つける機会を創造し、社会課題の解決につながるきっかけを生み出していきます。

d4p

検索

<https://d4p.world>

D4PのSNS一覧はこちら



各地での取材をYouTubeで配信!



安田菜津紀と佐藤慧が、気になるニュースや出来事をラジオ形式で毎週水曜日に配信中。ゲストを迎える回ではインタビューを交えながら、様々なテーマを深掘りしていきます。

D4P YouTube Channel YouTubeで検索!

d4p

検索

